

小学校で出会った女の子

附属函館中学校 高橋 采伽

私が小学四年生のときです。私のクラスに障害のある女の子が転校してきました。その女の子が教室に入ってきたとき、そばに担任の先生とは別の先生が付き添っていました。私たちは「なんで？」と思っていました。しかし、それは、その子の自己紹介ですぐにわかりました。隣にいる先生がその子の耳元で何かをささやき、その言葉を女の子が少しずつ、ゆつくりと口に出していました。最初はみんな「え？」という表情でした。その後、付き添いの先生が私たちに女の子に障害があることを説明してくれました。そして、なぜ養護学校に行かないのか、を言いました。小学校でみんなと学びたいという思いがあるからと言っていました。私はどう接すればいいかわからず、最初はあまり話せませんでした。

その数日後、その女の子と他の友達と休み時間に遊びました。すごく明るくて、いつも笑顔で楽しそうでした。「ああ、普通の子と同じように接して大丈夫なのか。」と安心していました。他の友達もそう思っていたようです。その子はあつという間にみんなと仲良くなっていました。でも、他のクラスの人は先生からの説明だけではあまり理解できていないように思いました。

別の学年には、目の不自由な子や耳の不自由な子がいました。そういう普通の授業を受けることができない子たちの教室が「ワークスペース」と呼ばれる場所です。その女の子もワークスペースで勉強していました。知能の発達が遅れているからです。休み時間になると私と友達の何人かでワークスペースに行き、その子とオセロなどをしていました。ある日、クラスの男子の何人かに言われました。「どうしてあいつだけワークスペースでオセロやるんだよ。ずるいだろ。」と、きつい言い方でした。その後、先生が説得し、男子もワークスペースで遊ぶようになりました。その時、私はあまり理解されていないのだと気付きました。多く接することで、私はその子のことを多く知り、よく理解できていました。

でも、クラスの人たちも仲良くしてはいたけれど、それは朝と帰りの少しの時間だけだったのです。他のクラスの人は「話す機会があまりない。」「話しかけづらい。」とっていました。それからしばらくして、小学生が障害のある人に向かって失礼な態度をとっていた、という話を先生から聞きました。クラスにもそういう人がいました。先生はそれを注意しますが、注意された子は障害のことやその子のことについて正しく理解したわけではありません。それに、その子に接しようとしたくない人もいます。私は障害があるだけで他の人とは違う態度をとる人がいることをとても残念に思いました。私は、先生が言った言葉が忘れられませんが、

「みんなが障害のない体に生まれてきたことは決して普通のことではないんです。」という言葉です。

私は障害のある人を理解してもらうには、言葉で伝えるのもいいと思います。ですが、「ふれ合う」ということも大切だと思っています。

二つの基準がくれた心の輪

佐々木 一州

私には二つの基準で過ごした時期があります。今まで「健常者」「発達障害者」という二つの基準を生きてきました。

健常者として過ごしてきた時は、自分自身が発達障害であると思っていませんでした。学校では、クラスでの人間関係になじめずに困っただけで、成績もひどくありませんでしたので、周囲から取り立てて何か言われることはありませんでした。私も友達が少ないのは仕方ないと思いついて介さなかったし、親友と呼べる存在がいるという事実も手伝って、「困りごと」と意識しなかったのかもしれない。私の周囲に障害者がいれば、憐れむような目で見る反面、心のどこかに「俺は彼らのようにならなくてよかった」という驕りがあつたと今にして恥じ入ることもあります。

私が障害者として生きることになったのは、38歳の夏でした。発達障害と診断された当初は、今までの生きづらさが福祉によって軽減できるという安ど感に加え、社会の偏見にさらされる不安から有罪判決を受けた感覚に陥りました。このような複雑な心理で、私はひどく狼狽し、大学時代の友人たちに自分の心境を携帯電話のメールで綴りました。私を障害者として軽蔑するのかもしれない、意外にも彼らの答えは違っていました。私を心配し気遣う反応もあり、むしろ励まされる一方で、中には、別に肩肘張らずに受け入れてくれる人もいました。一通のメールで、こんなに親身になってくれる存在がいる自分は本当に幸せだなと思えた瞬間でした。

就労移行支援事業所では、前センター長は発達障害の特性から私を乱暴者と誤解し、周囲にもそれが伝わってしまい人間関係が築けなくなっていました。グループワークはどうか、施設外実習には当然参加できるような状態ではなく、独り悶々とパソコンのモニターと対面する日々が続きました。その苦境でも支えてくれたのは、地域生活支援センターの職員さん達や、新任のセンター長を始め施設の職員、利用者の皆さんでした。職員は当然健常者ですが、私を障害者ではなく、一人の人間として見てくれたことには大変助けられました。他の利用者も障害者を持っているにも関わらず、私のいいところを見て好意的に解釈しようとする努力に助けられました。

私がグループワークに出られず、コミュニケーション能力が上がらないと焦りに焦っていた矢先、札幌市の発達障害者支援センター主催の成人座談会に参加しました。そこには発達障害者の支援に特化した職員を頼って、私と共通の悩みを抱えた当事者たちが多く集まっています。ほとんど理解されない障害ゆえの悩みを彼らと共有できたのもうれいですが、職員さんの理解ある対応に救われました。発達障害者は概して「表には現れにくい障害者」として見られますし、それだけに理解もなかなか進んでいないのが現状です。友人など一般の人たちが彼らなりに私たちを理解しようとしてくれるのも大変ありがたいですが、発達障害者のケアに特化した支援者もいてこそ彼らのありがたみが一層わかるのだと思っ

ています。

先程述べてきたような二つの基準を通じてしてきた経験は、自分にとって新鮮であり、今まで自分が作ってきた価値観を変えるほど衝撃的なものでした。

健常者として生きてきた時には、自分自身の「弱さ」から目を背け、常に人になめられまいと鬼の形相をしていなければならず、苦しい上に人はほとんど寄ってきませんでした。

「弱いことは屈辱であり恥」と思い込んで来た時期もあり、今ではこういった経験も必要だったと考えています。特に、支援者を始め、学生時代の友人や、障害を持った仲間達には、感謝しきりです。

障害者として生きると決心し、月2回病院に通ってカウンセリングを受けていた時期は、自分の弱さを理解し認めることがまったくできていませんでした。施設に通うことになっても、他の利用者のあらゆる捜しをしては非難し職員の都合も考えず愚痴をこぼす有様。こんな自分が変わることができたのは、素晴らしい仲間や支援者の存在も大きいですが、施設の内外で積極的に行事に参加してきたことも自分と他人の理解をしようとする足掛かりになりました。自分も変わり人も変わったことで、お互いに成長出来たことが、心の輪でのつながりを果たせたのだと信じています。私は、心の輪を求めて、障害の有無に関係なく、人とながりがたかったのかもしれない。

私が最近、健常者との心の輪を強く感じた出来事は、自分が当事者側として人前で話すことに挑戦したことでした。一般向けの実践者報告会で、さまざまな職業の人を前にして話しました。私の个性的なエピソードに加え、時折ユーモアも織り交ぜ、聞き役の方と掛け合いをやったことで、場内は笑いと感心に包まれ盛り上がりました。世の中には「支援者以外にも俺の話を聴いてくれる人もいる」と人前で話すことへの自信になりました。次に日本全国の福祉職対象の公開成人座談会ではパネラーも努め、いつも以上に緊張したとは言え、途中で冗談を言ったりしながらも和やかに座談会の進行に協力できてよかったです。中には、私が退席する時に関心を持って声をかけてくれる人もいましたので、一人でも多くの方々と心を通わすことができた実感を胸に退席しました。

自分が動いて、関心を持ってくれる人たちがいれば、私から働きかけていきたいです。次は私が支援者や他の人たちから受けてきたやさしさを返していく番です。人から人へその連鎖が続けば心の輪が出来、発達障害などを持っていても暮らしていける社会になっていけばいいと切に願っています。私の経験が、他に同じような悩みを持つ人の支えになればと思います、今は自分磨きの最中です。将来は「働く発達障害者」として、自分の経験を話していきたいと切に願っています。